「コザ暴動」

「コザ暴動」とは

今から40年前の1970（昭和45）年12月20日（日）未明、沖縄住民の「怒りの炎」に包まれコザの街は燃え上がりました。「コザ暴動」です。

「コザ暴動」（騒動、事件、民衆蜂起等の表現もある）とは、この日の午前1時頃にコザ市（現、沖縄市）の軍道24号線（現、国道330号）で、道路を横断しようとした住民を米兵運転の車がはねて怪我を負わせたことが事件の発端となり、群衆が外国人車両を焼き討ちした事件のことです。

ＭＰと琉球警察が現場検証にあたりましたが、付近の歓楽街などから集まった民衆は、これまでの米軍側による事故処理に不信をいだいており、一帯は騒然となりました。さらに事故現場の近くで別の米兵による追突事故が発生すると、興奮した群衆は事故車やＭＰに投石し、ＭＰカーをひっくり返して火を放ちました。ＭＰは威嚇発砲しましたが、逆効果となり事態は収拾不可能な状況に陥ります。激昂した群衆は次々と外国人車両やＭＰカーに放火し、騒ぎは拡大の一途をたどりました。群衆の一部は外国人車両を焼き払いながらゲート通りへ進み、カデナ基地第２ゲートを突破、基地内の米人学校や消防車などを炎上させました。別の集団は軍道24号線を南下しライカム方面へと向かいましたが、島袋三叉路付近に阻止線を張った米軍の鎮圧部隊から催涙ガス弾の攻撃などを受け、騒ぎは沈静化へと向かいます。

６時間余におよんだ騒ぎは82台の外国人車両に損害を与え、建造物の被害５カ所、負傷者88人（沖縄側32人、米軍側56人）、騒ぎの際の逮捕者は21人を数えました（沖縄市発行『米国が見たコザ暴動』より）。

事件の背景には、同年９月に糸満で起きた米軍車両の主婦轢殺事件に対する米軍事裁判の「無罪判決」などがあり、米軍による長年の沖縄人抑圧や差別、人権軽視に対する民衆のうっ積した不満が一気に爆発したものといわれています。

戦後27年におよぶ米軍統治下にあって、沖縄の住民がこれほどまでに激しく直接行動に訴えて支配権力に対する怒りを爆発させた事件はありません。「コザ暴動」は沖縄の怒りを表す象徴的な事件として、今も県民の胸に深く刻まれています。

用語について

「コザ暴動」「コザ騒動」「コザ事件」「コザ民衆蜂起」等々と表現されるこの事件は、その歴史の評価の難しさを物語っていると思われます。事件の歴史評価はまだ定着していません。したがって、今号は事務局が使用する場合は便宜上「コザ暴動」に統一し、執筆を依頼した方々には各人の判断にお任せしました。

焼けた車の上に乗る子ども。思わずシャッターを切った。この出来事を象徴してい
思えた。軍道24号線（現、国道330号）／1970年12月20日　撮影：國吉　和

『セレクト！』

「ウチナーンチュは人間じゃないのか バカヤロー！」

昨年（二〇一〇年）コザ暴動（今回はコザ騒動ではなくコザの先輩方々から直接聞いていた暴動という表記をあえてさせて頂きます）をテーマにした舞台をコザのあしびなー（沖縄市民小劇場）で上演させてもらった。冒頭の叫びは芝居の中の一シーンであり創り出したセリフではなく、ラジオ沖縄に残っていた実際のコザ暴動の現場にいた民衆の肉声である。とても衝撃的なひと言であった。

それまで、何となく知ったかぶりをして、上面だけで通り過ぎていたコザ暴動に対する私の感覚を一瞬にして粉々にするには充分であった。

私は一九七一年生まれなので残念ながら当時の事を知らない。正確には知ろうとしてなかった。まで鬱積していた怒りが爆発した思いというか、うまく表現出来ないワジワジーが込み上げてきた。それは四〇年前も今も多少の違いはあれど、構図は全然変わってないという現実を目の前につきつけられた気がしたからである。

先述しましたが、私は当時の事を知らない。しかし知らないで済ますのではなく知らないなら知ろうと思い、舞台化する事にした。パンフレットにはこう書いた。

『沖縄に生まれ育ちながらＴＳＪとしては初めて「沖縄」を意識した舞台に挑戦しました。それは「沖縄」があまりにも身近で、大好きで、それでいて複雑で深くて、簡単には語れないという思いがあったからです。「セレクト！」は「選ぶ」「選び出す」という意味です。今回はあえて「沖縄」を「セレクト！」しました。もちろん押し付けがましいメッセージを投げかけるつもりは毛頭ありませんし、縄を見ていると何かが動き出そうとしている気がしてなりません。それを選ぶのも、選ぶ人を選ぶのも私達です。日々私達は選ぶことを迫られています。何を選んでいくのでしょうか？』

終演後たくさんの反響が寄せられた。「沖縄」「復帰」「コザ暴動」「基地」をキーワードにたくさんのウチナーンチュの、そして少数ではあるが県外からのお客様の意見をいただいた。

四〇年前のウチナーンチュの怒りに共感しているのがほとんどであった。

『コザは異文化を受け入れ、自分達とチャンプルーして独自の文化を築いてきた力強い街であるという話をよく聞く。その通りだと思う。だからこそ「コザ暴動」の裏にはやるせない怒りが見え隠れするのだと思う。今年私は「セレクト！」を再演する事に決めた。

（つは・しんいち）

劇中「コザ暴動」（あしびなー／2010年10月）

パフォーマンス「コザ暴動」（あしびなー／2010年10月）

＊執筆者プロフィール＊

一九七一年生まれ（南城市佐敷出身）
一九九〇年　笑築過激団入団（九五年退団）
一九九七～九八年　佐敷町青年会長
　　町民劇団「賞味期限」旗揚げ
二〇〇一年　沖縄タイムス芸術選賞奨励賞受賞
二〇〇六年　劇団　ＴＥＡＭ ＳＰＯＴ ＪＵＭＢＬＥ
　　（チーム・スポット・ジャンブル）設立。
現在、同劇団座長をつとめ、演劇人として、その他にもテレビ、ラジオなど多数の番組の司会、パーソナリティーとして活躍。
今年（二〇一一年）、芸歴二〇周年記念公演を八月に予定している。

「セレクト！」（脚本：榎本由紀　演出：津波信一）
二〇一〇年一〇月、沖縄市にて公演。
作品は、二〇一二年の本土復帰四〇年を視野に入れたオリジナル。暴動のあった四〇年前のコザの街にタイムスリップし、舞台が展開していく。

写真提供：津波　信一

「コザ」にはハ[illegible]があ[illegible]

高嶺　朝一

ヒストリート（沖縄市戦後文化資料展示室）の「コザ暴動を記録する会」での語り合いは、私にとって刺激的で誘発されるものがあった。誘ってくれた沖縄市役所市史編集担当主幹の恩河尚さんと渡眞利なおみさん、スタッフのみなさんに感謝している。

ちょうど四〇年勤めた新聞社を辞めて、その間にたまった仕事の垢とガラクタの整理作業に取り掛かっていたときだった。私の身辺と脳細胞は、自分でも恥ずかしいくらい雑然としていて、いまも整理は終わっていない。私にとってコザ騒動、そしてコザの街そのものが特別だった。記者として最初にぶつかった大きな事件だった。しかし、悔いの残る取材だった。仕事に就いて一年もたっていなかったので、技術的なことも含めて記者に必要なすべての面で不足していた。朝刊への突っ込み記事、号外の記事は今読んでもずいぶん大雑把で、恥ずかしい。

街角の戦争

騒動の起こった夜、私たちは現場近くのバー「アリス」で「毒ガス即時完全撤去を要求する県民大会（毒ガス撤去県民大会）」取材の打ち上げということで飲んでいた。騒動は一九七〇年一二月二〇日午前一時過ぎから明け方にかけてである。前日午後に美里村（現、沖縄市）で一万人以上の人々が参加して「毒ガス撤去県民大会」が開かれた。県民大会のデモも荒れていた。一部のデモ隊は警察官の制止も聞かず、毒ガスの管理部隊である第267化学中隊の基地内に突入した。デモの後、参加者の一部は中の町に繰り出し、デモで燃えつくすことのできなかったエネルギーを酒で発散させた。

いつものことだが、私たちも記事と写真を本社に送った後、中の町に流れた。マスコミ労協から動員された同僚、本社から取材で派遣された記者、中部支社の仲間含めて六、七人でどんちゃん騒ぎをした。飲むとハシゴをするのが普通だったので、報道部長の喜友名朝夫さん、社会部の末吉増一の三人でアリスのホステス一人を誘って那覇に行こうということになり、タクシーで島袋三叉路付近に差し掛かったところ、ライカム（琉球管区米軍司令部）方面から疾走してきた武装米兵をのせたトラックと出合った。

喜友名報道部長が「引き返そう」とつぶやいたので私はタクシー運転手にUターンを命じた。中の町からサイレンが聞こえ、夜の闇に火の手があがっていた。「暴動だ」と私たちは叫んだ。タクシーから降りた。ライフルや警棒を持った米兵らがトラックを降りて、道路の両側に列をつくって配置についていた。ローマ帝国の兵団みたいなヘルメットをかぶり、腕と足にはプロテクターを装備していた。

両側の歩道では、数千人の群衆が怒り狂ってビンや石を投げていた。道路の真ん中にMPカーとイエローナンバーの米人車両が引っくり返され、炎上していた。タイヤのゴムの焼けるにおいが鼻をついた。

群衆の間をかいくぐって騒ぎの中心地点である中之町交番と書いたが、数字的な根拠はなかった。なぜあの時、「万余の市民」としたか、記憶は定かでない。現場の騒然とした中で、ちゃんとしたメモを取る余裕もなかった。朝刊の降版時間も過ぎていて、それに同僚も私も相当酒に酔っていた。いろいろ言い訳はできるが、それにしても記事全体に正確さが足りない。救いは臨場感がある点であろう。

悔いの残る取材だったので、復帰一〇年の節目に琉球新報紙上に連載された「証言に見る―世替わり裏面史」の私の取材担当部分「コザ反米騒動」であらためて沖縄側と米国側の関係者を取材した。その後も『知られざる沖縄の米兵』（高文研刊）を書くため追加取材した。

コザ騒動については、ある程度全容を理解できたつもりでいたが、『米国が見たコザ暴動』（沖縄市役所刊）などで新しい事実も明らかになっている。私と同僚のカメラマン國吉和夫がたまたま参加したヒストリートの「コザ暴動を記録する会」で聞いた市民の証言のいくつかは、私にとって耳新しいものだった。コザ騒動と、もっと広い意味でこの事件が象徴する米軍統治時代については将来も、関係者の証言と新しい事実が明らかになっていくであろう。

毒ガス撤去県民大会（美里中学校）撮影：國吉　和夫

「コザ暴動を記録する会」（ヒストリートⅡ／2010年7月20日）

た兵隊と45口径の拳銃を持ったMP隊が陣取っていたが、その頭上に群衆の投げたビン、石などが降り注ぎ、そのたびに隊列が乱れた。投石が中断すると、逆にMPや兵隊が奇声を発して群衆に襲いかかった。一進一退の攻防が続いた。

突然、ターン、ターンと乾いた発砲音がしたので前方を見ると、45口径の拳銃を空に向けたままの姿勢で一人のMPが誰かを追いかけてきて、私の目の前で横転した。起き上がったMPは群衆をにらみつけると、あたふたと仲間のほうに戻っていった。

腕時計を見ると、午前二時を過ぎている。まだ朝刊の二版に突っ込めるかもしれない。写真を撮らなければ。そばにいた末吉に「本社に連絡してほしい。ボクは中部支社に戻ってカメラを取ってくる」と頼んだ。交番をのぞくと、中は荒らされ、受話器がはずれ机のそばで揺れていた。私は後で知ったのだが、末吉はその受話器をとって試しにかけたら、ちゃんとつながったというのである。幸運だった。

もう一つラッキーは、胡屋十字路のコザ署向かいにあった中部支社に戻ると、「毒ガス撤去県民大会」取材の後で、写真部の國吉和夫がストロボとフィルムをセットした状態の二コンを机の上に置いていてくれたことである。私は写真に自信はなかったが、おかげでその時、撮った写真が評価され、編集局長賞（たしか五ドルだったと思う）を貰った。写真の中の一枚は、琉球新報紙面以外に全国紙、地方紙に配信され、掲載された。

走って現場に戻ると、群衆はあたりかまわず、MPカーやイエローナンバーの車を引っくり返し、火をつけていた。米人相手のホテルの駐車場から米人車両だけが引き出され、燃やされていた。そこら辺にいる人たちが「よいしょ、よいしょ」と声を合わせて手伝っていた。手をたたいて笑っている女性もいた。まるで祭りのようだった。私は、ストロボをたいて撮りまくった。

突然、青年たちに取り囲まれた。「警察か」と聞くので、「新聞記者だ」と名乗ると、「証拠を見せろ」と迫ってきた。名刺を見せると、「俺たちの写った写真を新聞にのせたら殺してやるからな」と言って去った。燃えている車を撮るため、群衆のいる歩道ではなく、車道の中を進んだ。道路の真ん中は一番危険なはずなのに、そこだけは奇妙な静寂を保っていた。道路の両側は群衆と兵隊が対峙していたが、真ん中は時折石が飛んでくるだけだった。群集に向かって隊列を組んでいる兵隊の背中が見えた。群衆の投石に追われて逃げる兵士と体がぶつかったが、こちらが「プレス」と言うと、兵士は「オー、イヤー」と叫んで元の位置に戻っていく。間断なく車が爆発、火柱を噴き上げていた。

中部支社に引き返すと、報道部長が「朝刊二版用に記事を突っ込め」と怒鳴った。私はフィルムの託送を末吉に頼むと電話を取り、メモなしで記憶していることを詰まり詰まり読み上げた。本社では社会部の友利隆博デスクが文章になるように復唱したり、時折問い返したりして、記事をまとめてくれた。

彼は那覇の桜坂で飲んでいるとき、末吉の電話連絡を受け、本社にすっ飛んで帰り、輪転機を止め、制作関係の職員を電話で呼び出し、二版と号外を発行したのだ。輪転機を止めるのには、編集局長をはじめ社の幹部の許可が必要だが、彼は通常の手続きを踏まなかった。越権行為だが、結果的に彼の判断は正しかったので、叱責されることはなかった。

私が電話で記事を送っているそばで、報道部長がもう一つの電話で編集局長とやりとりしているのが聞こえた。報道部長は普段から吃音気味なうえにひどく酔っ払っていたので、編集局長に話がなかなか通じないようだった。「た、大変です。コザが燃えています。輪転機を止めてください。止めて朝刊二版と号外に記事と写真を突っ込まないと後悔しますよ」。そのようなことを言っているが、就寝中に起こされた編集局長は状況が理解できないようで、一度は電話を切った。報道部長はまた電話をかけると、「アメリカーの車がどんどん焼かれています。暴動です。号外を出してください。歴史的な事件です」と哀願したかと思えば、「あんた号外出さなければ、一生後悔しますよ」と脅したりしている。

私が電話で送稿のやり取りをしている間も、末吉とアリスのホステスが情報の追加補充をした。特に彼女はハイヒールをぬいで、現場を走り回り、情報収集してくれた。私たちは大助かりだった。

そのうち本社と近くの支局から応援記者、カメラマン、デスクたちが米軍による交通封鎖線をくぐってコザに次々やってきて、支社はこれら取材陣でにぎやかになった。とりあえず私たちの出番はなくなったので、支社二階の四畳半で仮眠をとった。当時、私は独身でそこをねぐらにしていた。

昼ごろ、外に出てみると、大勢の人々が焼かれたMPカーや米人車両を眺めていた。定期バスも焼けた車を避けるようにゆっくり走っていたが、乗客が窓から身を乗り出すように見ていた。私は、騒動の現場である中の町、胡屋、嘉手納空軍基地第二ゲートに繋がるL字型の道路沿いを何度か往復した。報道や警察関係者が道路中央の何カ所かに集められた焼け焦げた車の固まりを懸命に写真を撮っていた。

琉球新報の号外があちこちで風に吹かれているのを見ながら、前夜のあの騒動が自分とは関係ない出来事だったかのように感じられた。足や肩などの筋肉痛だけがあの騒動を覚えていた。

米軍当局が受けたショックは大きかった。ランパート高等弁務官は夕方、那覇の民間テレビ局の

京都ホテルの前で撮った１コマ　撮影：高嶺　朝一　提供：琉球新報社

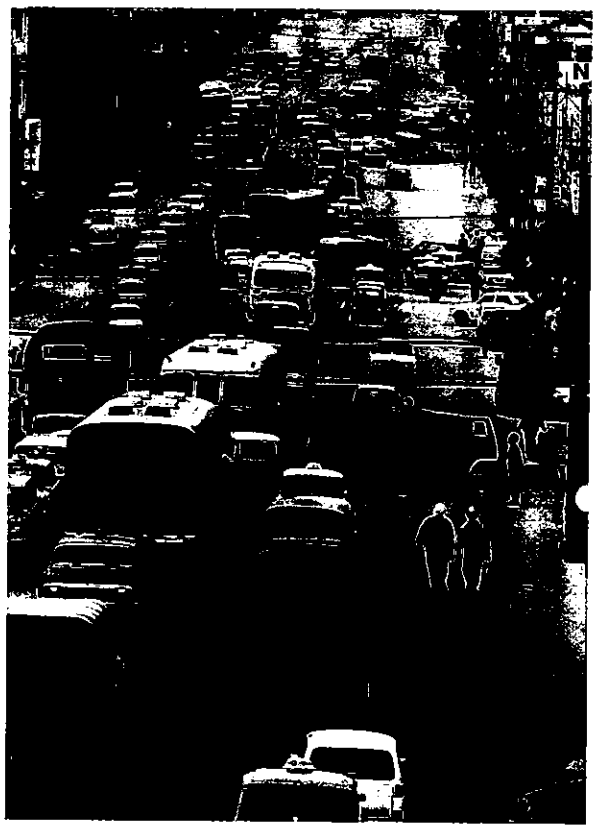
げかわしい事件は、一人の海軍軍曹が軍法会議で無罪となったことに一部起因している、と私は聞いている。判決の結果に納得しないで、批判することは沖縄人だろうが、アメリカ人だろうが、許される。しかし、平和な市民の生命を脅かして、財産を破壊し、批判を暴動の手段に訴えて実行すういうやり方は『ジャングルの世界でしか通用しないおきて』（ザ・ロー・オブ・ザ・ジャングル）だ」と非難した。

米軍は、米人車両だけを狙い打ちにした騒動の背景に強い関心を抱いた。騒動が計画的に引き起こされたのではないか、特に騒動の直前に現場近くで開催された復帰協主催の「毒ガス即時完全撤去を要求する県民大会」との関係を疑っていた。琉球警察は、夜明けと同時にコザ署内に「12・20コザ反米暴動特捜事件本部」を設置し、本部、各署の応援を得て捜査に乗り出した。特捜本部は検察庁と協議し、騒擾罪の適用を決定した。特捜本部も「暴動は偶発的なものでなく、誰かければ、民間の商店などに被害を与えずに、あれだけの群衆が意志を統一したように整然と外人車両だけを焼き討ちできるはずはない」と見ていた。

捜査は難航した。事件直後の中の町の飲み客の話題は騒動の武勇伝だったが、捜査が始まったのがわかると、飲み客もホステス、ボーイも一切この件では口をつぐんでしまった。警察官だとわかると、非番で飲みに行っても歓迎されなくなった。

事件の最中、米憲兵隊が検挙した約二〇人の身柄が特捜本部に引き継がれた。あの夜、第二ゲートを突破し、嘉手納空軍基地に侵入した人たちだった。年が明けて一月八日、バーのボーイ、マネージャー、無職など十人が騒乱、放火、公務執行妨害、暴力行為、米軍布令違反などで逮捕された。私たち新聞記者や弁護士は、毎日、寒風に震えながら、コザ署の入り口で、きょうは誰が逮捕されるか、様子をうかがっていた。一月二九日から二月一八日にかけて、新たに二〇数人が逮捕された。その中にコザ市職員、高校教員、自治労青年部長、社会党員らがいた。

高校教員は指導者として県内では知られている人物だった。彼は職場の忘年会の帰り、騒動の発端となった交通事故現場に遭遇した。「事故処理が米兵に有利に行なわれているというので、群衆が集まり、一瞬のうちにMPカー、米人車両を焼いた。あの騒ぎと群衆の中で、職場の同僚はバラバラになったが、お互いに興奮していて、そばにいる人はバーのボーイさんや知らない人だろうが、みんな虐げられた同じ沖縄県民ではないかという感じで、一心同体で燃えた」という。彼の逮捕令状には「石を投げたり、ブロックを割ったりして、群衆一人ひとりに手渡した。群衆を指揮し、扇動した」とあり、容疑は「騒擾罪」だった。



焼けた車、処理のための車を避けて、縫うように走るバス・トラック・・・。日常の生活を止めるわけにはいかない。
軍道24号線（現、国道330号）　撮影：國吉　和夫

首魁は民衆そのもの

二月中旬には、特捜本部筋から「革新政党の幹部の逮捕に近く踏み切る」との情報がしきりに流された。しかし、革新政党の幹部、民主団体のリーダーは逮捕されず、三月一一日特捜本部は解散した。現場逮捕二一人を除いて特捜本部が事件送致したのは、五四人、うち五一人が騒擾罪、三人が公務執行妨害だった。

騒擾罪の成立要件には、首魁とそれに扇動された付和随行がいて、謀議して騒乱を起こしたという事実がなければならない。しかし、首魁も謀議の事実も捜査ではつかめなかった。それで巷では「首なし騒乱罪」と言われた。騒動の主役は政党、民主団体の幹部ではなく、民衆そのものだった。

琉球高検は四月一九日、騒擾罪容疑で事件送致されていた八二人（少年一四人を含む）の処分について「騒擾罪の適用を断念する」と発表した。一〇人を凶器準備集合罪と放火で、那覇地裁コザ支部に起訴、少年三人を家裁送りにし、その他を不起訴処分にした。

起訴された一〇人は、騒動の最中、ビンにガソリンを詰めて火炎瓶をつくったレストランのコック二人とバーのボーイ、会社員、労務者、鉄工所経営、運転手、無職などだった。民主団体、労働組合関係者は起訴されなかった。起訴されたのは組織に関係のない人たちだったが、当時、大衆闘争の中心として存在していた復帰協は「県民の怒りを代って爆発させてくれた人たちであり、『名誉ある被告』」ということで、全面的に裁判闘争を支援した。

公判は長引き、復帰後まで持ち越された。那覇地裁コザ支部の判決が下りたのは、一九七五年六月である。被告たちには、懲役一〇カ月から二年、執行猶予一年から三年の判決が下りた。被告と弁護団は判決を不服として控訴した。福岡高裁那覇支部が控訴を棄却し、被告、弁護団が最高裁への上告を断念して、刑が確定したのは一九七六年である。

裁判闘争を通じて、被告と弁護団は「コザ反米騒動における民衆の行為は、米軍支配下で抑圧された沖縄の人々の抵抗権の行使である」と正当行為論を主張した。

騒動の後、米軍当局はコザ市（現、沖縄市）内に「オフリミッツ」（米軍兵士の立ち入り禁止）を発令した。クリスマスや年末のかきいれどきなので米人相手のバー、レストラン、スーベニアショップ関係の業者は悲鳴を上げた。クリスマスイブに私はゲート通り（現、コザゲート通り）、センター通り（現、中央パークアベニュー）を回ったが、例年この時期はネオンサインが輝き、ジュークボックスの音楽が流れ、Aサインバーの呼び込みの声で騒々しい通りが、ゴーストタウンのように静まり返っていた。冷たい風が吹いていた。野良犬が

ジャンパー姿のGIが通りにやってきてバーのシャッターを叩いたが、返事がないらしく嘉手納基地の方角に消えていった。あの頃、流行っていたマカロニ・ウェスタン（スパゲッティ・ウェスタン）の一シーンのようだった。

オフリミッツは一二月三〇日に条件付きで解除（午後六時～午前零時）されたが、全面解除となるのは翌年（一九七一年）二月一二日である。一方で騒動直後の一二月二一日に米軍基地の沖縄人従業員の大量解雇発表があり、全軍労は翌年二月一〇日から一一日、三月二日から三日、四月一三日から一四日と波状ストライキを実施、米軍はそのつど「コンディショングリーン」（警戒態勢）を発令し、軍人軍属の外出を禁止した。米人相手の業者の中には倒産するのも出た。コザ市は恐慌に襲われた。嘉手納基地第二ゲートでの全軍労ストのピケットラインを基地関係業者と右翼の青年グループが角材などで襲撃するなど、業者と全軍労が対立した。大山朝常コザ市長に「殺してやる」と脅迫状も届けられた。私たち新聞記者への基地関係業者の風当たりも強かった。私自身も、取材

軍雇用員の大量解雇の撤回を求め、全軍労以外の支援団体や学生らも集結。
動員された機動隊との対立場面もしばしばあった。
（ゲート通り／1971年1月、2月）撮影：國吉　和夫

現場で青年グループに取り囲まれたことがある。

外部の圧力によって経済的に、生活が立ち行かなくなって住民同士が争う、分断されるという沖縄の戦後史のなかで繰り返されたパターンだ。

一九八二年に私は米国のバージニアに退役して民間会社に勤めていたジョン・J・ヘイズ元少将を訪ね、取材した。彼は沖縄から毒ガス兵器を撤去する作戦（レッドハット作戦）を指揮し、在沖米陸軍で高等弁務官に次ぐ地位の人物である。「私はヘリコプターでコザ市上空から（騒動を）見たが、ところどころ火が燃えていた。場所によっては爆撃を受けた跡のようであり、戦争で破壊された光景と似ていた」「（米軍兵士は）ベトナムでそんな事態が起こるというのは本など読んで知っていたかもしれないが、沖縄で戦闘に従事しなければならないことなんて思いも付かないので、みんなびっくりしていた」とヘイズ少将は話していた。

沖縄の人々は「守礼の民」で極めて統治者である米軍に対して従順であり、時折、デモなどで抗議の意思を示すが、暴力的でなく平和的であるというようなことが、軍当局が新入りの兵士や外部のプレス用に配る案内書には書かれていた。コザ騒動は、沖縄の戦後史の中で大衆による「暴力の行使」という点で異例だ。しかし、統治者に差別され、不当に抑圧された民衆の鬱屈した感情が爆発、暴力の形態をとるのは、世界のどこにでもある。

「制御された暴力」だったという点がコザ騒動の特徴である。これは統治者にとっても、沖縄の人々にとっても不幸中の幸いだった。「米軍人に負傷したのはいたが、殺されたのはいなかった。危害が加えられたのは物的なものに対してだった」、「プラザの米軍人住宅地域に群衆が侵入、家族を負傷させたり、殺したりしたら、米国人は発砲しただろうから、虐殺が起こっていただろう」とヘイズ少将は語っていた。あの夜、私も取材で第二ゲートから嘉手納基地に入り、武装した兵士を乗せたトラックの列が待機しているのを目撃、凍りついたのを覚えている。

人に向かわない暴力

人命を奪うような決定的な破壊にまではいかない民衆の行動形態と限界はどこからくるものか、いまもって私にはわからない。マッチョなヒーローが悪漢を殺しまくるハリウッド映画とは違う。あの夜は、みんな酒を飲んでいた。米軍の直接統治に対する鬱積していた感情を抑制することができず、羽目をはずしただけのことだったのだろうか。

「暴力が人に向かわなかったのは小さいときから米国人と触れ合ってきたからだと思う。米国人も一人の人間として見る目がコザの人にはあったのではないか」とコザ暴動を記録する会世話人の古堅宗光さんは、「コザ騒動から40年座談会」で話していた。沖縄市史編集担当主幹の恩河尚さんは「ある証言者は『現場で、大衆の後ろで中の町の女性たちは支持していた』と話した。一方で、少しひどくなると、やり過ぎだと止めていたという。共通しているのは米兵個人はみんな好きだと言うこと。軍隊や組織を憎んでいるのであって、米兵個人に憎しみを持っていないという話を聞いたときに、コザ騒動はかなり複雑だと思った」と語っていた。

この座談会は琉球新報中部支社報道部長の松永勝利の呼び掛けで、沖縄市の旧ゲート通りのかっちゃんのライブハウス「JACK NASTY'S」で開かれた。古堅さん、恩河さんのほか沖縄国際大学准教授の桃原一彦さん、それに私も出席した。私としてコザ騒動はおおよそわかっているつもりだったが、三人の話には触発されることが多かった。

騒動の現場にいた二、三千人とも見られる一人ひとりの過去の体験、家族の体験、それからくる理不尽なことに対する怒りが爆発したものの、やはりその限界を意識して、結果的に「制御された力の行使」に止まった。古堅さんと恩河さんは私よりわかりやすく説得力のある言葉で説明していた。

桃原さんは研究者らしく「コザ騒動はある意味、沖縄の植民地的状況を考える上で重要な出来事」と結論付けていたが、同感である。あえて私なりに表現すればこの四〇年間、沖縄は日米両政府によって軍事植民地の状態に置かれていると思っている。

座談会の夜、古堅さん、恩河さんたちから一二月一八日夕方からヒストリートでコザ騒動四〇年を考える集いとその後、現場を追体験するツアーを予定しているので、案内人の一人になってくれと頼まれた。その日は午前中は定例のゴルフコンペに参加しなければならないこともあって、答え

独りでコザまで行くのはなんだから、首里で学童保育園を経営している友寄英紀を誘った。彼は騒動の時、二〇歳でコザで反戦GIの支援運動をしていた。あのとき、黒人グループが沖縄の人たちに連帯を呼び掛けたビラの印刷と配布を手伝っていた。還暦を迎えたばかりである。いきなり私から電話で呼び出され、戸惑ってはいたが、久しぶりにコザに行けるというので、うれしそうだった。彼は騒動の後、しばらく県内のテレビ局で働いていたが、辞めて米国の大学に入り、そこに籍を置いてプエルトリコ、グアテマラ、インド、アフリカへと世界の旅に出た。プエルトリコでは貧民地域に住み、ビエケスの米軍射爆場の反対運動にも参加した。集いで司会の古堅さんから証言を求められ、彼は最初は戸惑っていたが、堰を切ったように四〇年間の半生を話し出した。彼の中で抑制できない感情が動いたのであろう。ヒストリートでの「コザ暴動を記録する会」の集まりは、ベトナム戦争時代のティーチインを思わせた。年齢と現在の立場と関係なく、自分の過去と真剣に向き合わざるをえないような雰囲気だ。

寒空の下、ヒストリート前にて行われた「コザ暴動を記録する
2010年12月1

コザ騒動は、何年たっても当時現場にいた人にとっては、突き動かされる何かがあるようだ。それは私たち沖縄に住んでいる者だけでなく、統治者側にいた者にとっても思いは同じようだ。

ロケ現の上に私たちの後を追いかけて中の町の現場にきたとき、突然、元米陸軍MPのブルース・リーバーさんが現われ、私たち案内人はもちろん取材関係者も驚いた。

私は琉球新報中部支社報道部の問山栄恵記者がリーバーさんとメールでやりとりしていて、彼が騒動四〇年で来沖し、問山記者のインタビューを快諾しているとの話は聞いていたが、現場に本人がやってくるとは思わなかった。

彼は群衆を退散させるため上司の命令で最初に威嚇発砲したMPのひとりだった。群衆に横転させられた彼のMPカーの写真もある。問山記者のインタビュー記事の詳細は、二〇日付琉球新報朝刊の一面、社会面のトップを飾ったが、リーバーさんの証言内容には共感するものがあった。「沖縄の人が怒るのも無理がなかった。戦後、米兵たちは沖縄の人を『人間以下』に扱い、あまりにもひどいことをしていた」「沖縄の人たちはなぜ第2のコザ騒動を起こさないのか」と、彼は広大な米軍基地が変わりなく存在している現状に疑問を投げ掛けた。

権力の象徴ともいえたMPカーも無残な姿に。（胡屋十字路）撮影：國吉　和夫

彼は騒動の後、「軍隊は私のいる所ではない」と考え、除隊し故郷に戻り、大学に入った。現在、印刷会社を経営している。沖縄の歴史や文化などを自分で学んだという。MPは高等弁務官（High Commissioner）とならんで米軍の沖縄統治の象徴だった。MP全員がリーバーさんのような良心的な人物ではないかもしれない。しかし、私たちが沖縄の現状を説明すれば、十分に理解してくれる知識と感性を持った人たちだと信じたい。

リーバーさん　（中の町／2010年12月18日）

一九八二年に私は琉球新報の「証言に見る――世替わり裏面史」の関連取材で、歴代の高等弁務官たちを訪ねて米国各地を旅した。彼らは沖縄の司法、立法、行政の全権を握っていた。沖縄住民の生殺与奪の権限は彼らの手中にあったのだ。キャラウェー高等弁務官（陸軍中将）のように「独裁者」と呼ばれ、沖縄の人々から恐れられた人物もいた。しかし、初代のムーアさんをはじめ歴代の高等弁務官たちも直接会って話すと米国のどこにでもいるような好々爺だった。キャラウェーさんもそうだった。

沖縄の人たちが米軍基地に対して反対運動している気持は理解できる、広大な国土の米国とは違うからというようなことを異口同音に話していた。私にすれば少し拍子抜けの感じだったが、彼らが権限のある地位にあるときにそのような言葉を聞きたかった。しかし、希望はある。沖縄から米国の世論に訴えることによって米国の沖縄基地維持政策は変わる可能性があるからだ。

沖縄が日本に復帰して三八年、日本政府が米国との間に入り「衝撃吸収構造」が出来上がり、沖縄の声がストレートには届かなくなった。私たちは衝撃吸収構造を迂回して沖縄に基地を置いている米国の世論に訴える作業をしたほうが、時間はかかっても確実で効率的だ。なぜなら米国政府が

音楽、映画、芸術で爆発

騒動現場をみんなと歩きながら、この四〇年の歳月は何だったか、と考えた。論理的に整理しようとしても整理できない、不思議な感覚にとらわれた。たしかに街の風景は私たちの風貌が歳月を経て変わるように、様変わりしていた。それでも老人になっても幼い頃の面影が残っているように、コザの街のどこかにあの時の記憶を呼び覚ます何かが残っている。それは中の町に入ったところの路面であったり、駐車場のフェンスの錆びであったり、いろいろある。

と、そばを見ると、國吉和夫が大きな声を出して現場の説明をしていた。友寄英紀はリュックサックを背負っている。いつも悲憤慷慨している比屋根照夫先生（琉球大学名誉教授）の顔も見える。あの時よりはみんな歳を取ったが、ここにたしかにいる。そう思ってまわりの人たちを見ると、取材の美里高校放送部の生徒たちも含めて、みんなどこかで会ったような気がしてきた。

追体験ツアー　（コザゲート通り／2010年12月18日）

騒動の時のように中の町から胡屋十字路を通って嘉手納第二ゲートに進むと、当時とは比較にはならないが、あの陽気な米兵たちはいつものように振舞っている。ライブハウスに入ると、沖縄の沌としたアナーキーな雰囲気は昔と変わっていない。

この感覚はなんだろうか、タイムマシーンに乗って過去と現在を行ったり来たりしている。時空のラビリンスにはまってしまったかのようだ。いやこれが「ヒストリート」（Histreet）なのか。この数週間、私にとってすべては恩河さんたちの「ヒストリートに来ないか」との連絡から始まった。

誘発されて私は当時、反戦ＧＩ支援運動をしていた友人たち探しを始めた。「Facebook」などで彼らの消息を調べると、サンフランシスコ、ワシントン、オハイオ、ハワイなど米国各地でみんなそれぞれの分野で頑張っていて、沖縄の問題に関心を寄せている。復帰の日、土砂降りの中、那覇市の与儀公園で開かれた県民大会で連帯挨拶をしたシャロンは労働運動やさまざまな市民運動のリーダーとして活躍している。彼女の書いた「普天間基地」問題のレポートがいろんなインターネットメディアで配信されていた。彼女に沖縄を再訪するようにメールで連絡すると、「復帰四〇周年に行けるように休みとお金を貯めている」と返ってきた。そして返信メールの末尾に「Chibariyo!」と添えられていた。すべてはコザから始まった。コザ騒動四〇周年で終わったわけではない。これからまた始まるのだ。

ひがよしひろ さんによるライブ
（CAFE　OCEAN／2010年12月18日）

コザでなければ、あのような民衆蜂起は、起こらなかっただろう。那覇では起こらなかった。コザにはあのときのようなパワーがある。たまたま一九七〇年には暴力の形を取って噴出したが、近い将来、映画、音楽、文学、ファッション、エイサーや空手のような伝統文化が融合して、爆発するのではないか、と私は予感している。

中の町、旧ゲート通り、旧センター通りなどいまは人数も少なくなっているが、近い将来、昔以上に外国人、日本人、ウチナーンチュでいっぱいになるはずだ。「ＫＯＺＡ」が世界中に知られるようになるだろう。

コザにはもともと人を引き寄せるパワーがある。

（たかみね・ともかず）

＊執筆者プロフィール＊

一九四三年那覇市生まれ。
七〇年琉球新報社入社、中部支社報道部記者、政経部で基地問題を担当、編集局長、論説委員長、代表取締役社長などをへて現在、Ｔ＆ＣＴ　Ｏｆｆｉｃｅ代表。
著書に『知られざる沖縄の米兵』（高文研）、論文に「平和のキーストーンへの行政戦略　沖縄基地カードの可能性と限界」（日本平和学会『平和研究23号』）等がある。